

第1回北海道支部会の報告

支部長 堀 元

進 (3期生)

平成23年10月29日(土曜日、15時～17時)大通公園を見渡す札幌テレビ塔の3階、中空に位置する貸しスペース「ライラック」において長年の念願であった北海道支部の発足会が開催された。

北海道内からの参加者は1期生の八田先生、2期生の磯先生を始めとし、22期生の町田先生まで卒業生が合計8人。沖縄から参加して下さったのは寄生虫学前教授・琉球大学副学長の佐藤良也先生、解剖学第一教授の石田肇先生、歯科口腔外科学教授の砂川元先生。3名の先生方が遠路を厭わず来賓として足を運んで下さった。又、事務局を代表して、5期生の屋良さとみ先生が、東京の学会の帰路に南下の前に一旦北上する形で参加。日本を縦断する形での賑やかな会となった。

会場からは例年より遅い紅葉の大通公園が見渡せる。遠く眺望の開ける西側には、自然が豊かに残る手稲から藻岩にかけての山並み。既に夏の緑は遠く去り、紅葉の茶色さえも失いながら冬を待つ景色である。その中に小さな直線状の人工構築物が見える。1972年の札幌冬季オリンピックの時に建設され、その後も毎年各種のスキー大会が開催されている日本ジャンプ競技のメッカ、90m級ジャンプ台「大倉山シャンツェ」である。夕景に映える大自然と文明の調和を背景に、琉大医学科同窓会北海道支部は設立された。

会の進行は講演二題が柱。まず、佐藤先生から現在の母校の状況及び医学科の今後の展望に関して「琉大医学科の現状報告」と題した御講演を頂いた。独立行政法人化を経て、様々な制度変革に対応しながら我が琉大医学部の創設理念「南に開かれた国際性豊かな医学部」を実現すべく、諸先生が奮闘している状況が披露された。困難な時代である。大学とて蚊帳の外ではない。解決すべき問題は山積しているのである。又、琉大副学長の立場からより広い視野から琉大全学の方向性と医学部の位置付けについて説明頂いた。見識を深めるのに大いに役立つお話であった。5期生の屋良先生からは、卒業生の国試合格率が低迷している事、同窓会としては可能な限り支援への努力を行っている事、今後も卒業生が心を合わせて後輩の応援を行ってゆく必要がある事、等が報告された。いずれも、大学を離れている卒業生にとっては日常の生活環境の中では思いを馳せる事の少ない、しかし自分たちにとって学生時代を過ごした学舎に関する大切なお話であった。石田先生、砂川先生からも御自身と北海道の関わりについての御挨拶を頂戴し、最南端の県に



ある琉大医学科出身医師が北の地に於いて琉大卒ならではの暖かな医療を行って欲しい旨のメッセージを頂いた。

会場であるテレビ塔は連絡通路で大通公園の地下ショッピング街に連結されている。その地下街には大きな面積を持つ沖縄県産品店「わしたショップ」がある。当日はそこから仕入れたオリオンビールと泡盛、そしてさんびん茶が供され、「くわっちい」を楽しんだ。

卒業生諸氏はその殆どが初顔合わせである。然も、年齢的には皆仕事に忙しく、なかなか自分で自由になる時間を作れない境遇であろう。その中で、予想以上の多くの卒業生に参加頂いたが、お互いにまだ良く知らない同士である。年齢も相当な開きがある。接点は同窓の一点。ゆっくり歓談を、というのは土台無理な話である。余興の三線演奏は「トゥバラーマ」「十九の春」そして「安里屋ユンタ」。寒空の北海道の中空に設定された会場に沖縄音階が忽然と現れた趣向である。学舎の記憶は徐々に蘇り、過去と現在が重厚なタピストリーの縦横の織り糸の如くに色彩を帯びて来る。旅路に一時立ち止まる旅人の趣き。今、北の大地に点と点を繋ぐ新たな糸が燃れたのだと思う。

保育スタッフを用意した会としたので、子供たちの参加もあり賑やかでなごやかな会となった。設定した2時間はあっという間に過ぎ去る。同窓会として、医師同士の情報交換の場として、そして何より、南に学んだ北国在住の仲間のお互いの助け合いの場としてこの会が役立つ事を願いながら散会。

これから雪に閉ざされる数ヶ月を耐える糧を得て、それぞれの家路につく。暫し、頬に感じた南風を確かな記憶に、白い季節の先にある春を待つ。花々が一斉に咲き誇る生命の季節。北国の一番心躍る季節である。北海道支部総会は来年からも年に1回の定期開催を予定。今年お集まり頂いた諸氏に深く感謝すると共に、来年はより多くの卒業生が気軽に参集して下さる事を切に願う。人の輪が広がる。沖縄からの南風は北極星(ニヌファブシ)に向かって吹く。その暖かな風が北の大地に出来た支部を束ねてくれる事を信じている。

